

## メッセージアウトライン

### ヨハネ20：1~18 「週の初めの日の朝」

「週の初めの日の朝」(1)日曜日のこと。イエスは金曜日に十字架につけられ、土曜日は安息日で出歩くことができず、三日目の日曜日の朝まだ暗いうちに弟子の女性たちがイエスのからだに香料を塗ろうとして墓にやって来たのである。ここではマグダラのマリヤに焦点が当てて書かれているが、他の女性たちもいたことが並行箇所からわかる。→マルコ16:1, 路24:10 ところが何と墓からはすでに石が取りのけられていた。それで彼女たちは走って弟子たちのところへ行って、そのことを報告した。(2) その弟子たちとはシモン・ペテロと「イエスが愛されたもうひとりの弟子」(ヨハネのこと)であった。それで彼らはそれを確かめに墓に走って行き、若いヨハネのほうが先に着いた。(3,4) しかしペテロのほうが先に中に入り、そこにイエスのからだに巻かれていた亜麻布が置いてあるのを見た。(5~7) ヨハネもペテロの後から入り、この様子を見て「信じた」。(8)この「信じた」というのは、イエスのからだを墓場泥棒が取っていったのではなく、イエスがからだをもって復活したことを信じたという意味である。彼らはまだイエスの復活に関わる聖書のことばを理解していなかった。(9) 彼らはとにかくイエスが死より復活されたことを信じたが、それだけにとどまり、不思議なことだと思いながら帰って行った。(10) 再び墓まで来ていたマグダラのマリヤは、ペテロとヨハネが帰った後も、なおもそこに立ち続け、イエスのことを思って泣いていた。(11) 多く赦された者は多く愛するというが(路7:47参照)、彼女はまさにそうであった。彼女が泣きながら墓の中をのぞいた時、そこに二人の御使いを見た。(12)「だれかが私の主を取って行きました。どこに置いたのか、私にはわからないのです」(13) 彼女はまだ墓場泥棒がイエスの死体を取って行ったと思っていた。その時、ふと彼女が振り向くと、そこにイエスが立っておられた。(14)しかし涙にくもった彼女の目にはそれがわからなかった。イエスの、「なぜ、泣いているのか…」との問いかけに彼女はそれを園の管理人だと思い、自分がイエスのからだを引き取ることを願った。(15) この時イエスは彼女に「マリヤ」と呼びかけられた。(16) 懐かしい呼び方であり、これで瞬間的に相手为谁であるか彼女にはわかった。「ラボニ」このことばも常日頃マリヤがイエスに対して使っていたことばだったであろう。彼女はうれしさのあまりイエスにすがりついていたようである。しかしイエスは彼女に言われた。「わたしにすがりついてはいけません。わたしはまだ父のもとに上っていないからです」(17) 父のもとに上ることこそイエスの救い主としての使命の完成であった。→ヨハネ14:2~3,16:5~8,13

そして、イエスが彼女に言われたことは「わたしの兄弟たちのところに行き、彼らに『わたしは、わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神のもとに上る』と告げなさい」であった。今やイエスは弟子たちを「兄弟」と呼ばれ、「わたしの父」はまた「あなたがたの父」なのだということを強調される。マグダラのマリヤは喜びのうちにさっそく弟子たちのところに行き、これらのことを告げた。(18) 彼女がイエスのことばに従って弟子たちにすばらしい喜びの知らせを伝えるに行ったように、私たちもこのすばらしい福音を喜びをもって他の人々に宣べ伝えよう。